荒木山通信

2019年4月
第5号
荒木山の古墳を顕彰する会

北房の古代が熱い！

「これを見て下さい。」そう言って、老師は木箱を持って来た。

「これは！英賀廃寺の軒丸瓦ですね。」

驚いている私を見て、老師は次のように話した。これは、息子が北房中学校に通っていた時拾った物で、当時の毛利博校長が、

「君がこれをくれたら、卒業まで社会科は五点にしてやるが、どうじゃ。」

と言ったという。毛利校長らしいジョークである。

旧北房中学校は、英賀廃寺の在る台地の裾に在ったから、私も中学生の頃よく歩き回っていた。

当時は、小さな田圃がモザイクのようであった。その中を細い道がうねうねと続き、潰れそうな水路が巡っていた。そこを歩くと、容易に布目瓦を拾うことができた。私が拾った瓦の小片には、親指の指紋がはっきり残っていて胸がときめいた。

〔英賀廃寺の軒丸瓦〕ふるさとセンター

※　英賀廃寺は、白鳳時代（七世紀後半）に創建された備中北部で唯一の古代寺院である。

【特別寄稿】

特異な古墳系列

総社市埋蔵文化財学習の館
館長　平井 典子

北房は、私にとって、とても興味深い地域です。

弥生時代の後期にも、谷尻遺跡のように畿内系の土器が多く出土し、人の移動を感じさせるものもありますが、やはり古墳時代から飛鳥時代の古墳のあり方に目がいきます。

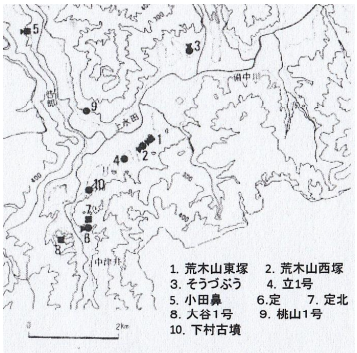
例えば、古墳時代前期の早い時期と考えられる荒木山東塚古墳、そしてそれに次ぐ荒木山西塚古墳ですが、低丘陵の頂部に隣接して築かれていますので、同じ系譜の首長墓と考えられます。しかし、東塚は前方後方墳、西塚は前方後円墳とランクが異なります。西塚古墳を築く頃には、前方後円墳を造ることが許されたのかも知れませんが、前方後方墳・前方後円墳がこのように近接して築かれた例を他に知りません。

また、古墳時代中期（五世紀）前半、巨大前方後円墳の造山古墳・作山古墳が造られた頃には、岡山県内において首長墓である前方後円墳はほとんど見受けられませんが、この北房の地では四キロメートルから五キロメートルの範囲内に一定程度の大きさをもった首長墓が、後期まで連続的に築かれています。牛窓湾沿岸でも似たような状況が見受けられ、これらの地域は吉備のまとまりの中に取り込まれていなかった可能性も考えられます。

飛鳥時代に入り、前方後円墳自体も新たに造られるものは少なくなりますが、横穴式石室をもち、段が築かれ、その周縁に外護列石と呼ばれる石を並べた方墳が出現します。これらの方墳は吉備の中枢地である県南では、七世紀前半で築造はほぼ終了したと考えられますが、北房の地では七世紀中頃以降も定北古墳や、この時期としては県内最大の方墳である大谷一号墳が築造され、特殊な副葬品も出土しています。

このような特異な古墳のあり方が何に起因するのか、吉備のまとまりの中でどのように位置づけられるのか、考えていきたいと思っています。

〔大谷一号墳全景〕



北房地域の主要古墳分布図　『北房町史』から引用

東塚後方部に埋葬施設か？
ー レーダー探査の分析結果から判明 ー

昨年十一月最終週に六日間連続で行われた官民学協働によるレーダーや磁気及び電気照射による地中探査の結果、東塚（前方後方墳）の後方部中央並びにその西側に埋葬施設らしき反応があることが分かりました。

これは、地中にレーダーを照射して、深さごとの反射を計測し、それを平面に置き換えた画像（画像①参照）を分析して判明しました。

まず、図①の画像では、後方部中央四〇ｃｍ～八〇ｃｍの深さに青色で反応の弱い方形の部分（四ｍ×七ｍ）が見られます。墳丘の中心部に方形で周りと土質の異なる領域があるということは、何らかの人工的な造作の結果と考えられ、墓壙（墓穴）の可能性が高いと思われます。墓壙があるのに石材と考えられ反射がないのは木棺直葬（②想像図）もしくは粘土槨の可能性があると推測されます。粘土槨なら（画像③）の感じです。

木棺を粘土で覆った形を粘土槨と言います。墓壙部分が四ｍ×七ｍと比較的広いので、粘土槨の可能性が高いかもしれません。

次に中央部西側に赤色で長方形のやや強い異常反応（五ｍ×二ｍ）が見られます。石室の可能性があります。天井を画像④のような石板で塞いでいる感じです。石室であれば複数埋葬が考えられます。（画像④）

ところで、後方部に比べて前方部には際立った反応は見られませんでした。

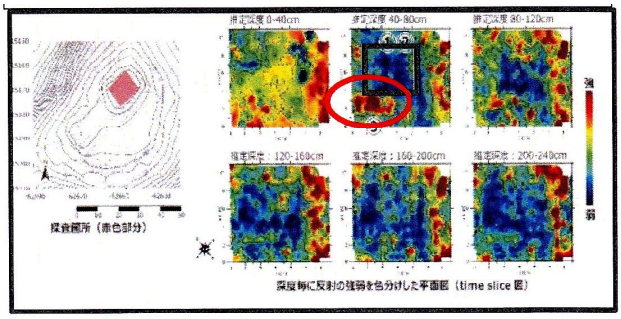
結果から、東塚には中心主体が竪穴式で木棺直葬か粘土槨に埋葬され、第二主体が石室に埋葬されているようです。最新鋭の探査技術（非破壊検査）に驚きます。

この外、電気や磁気探査の結果にも報告すべきことがありますが、次回にします。

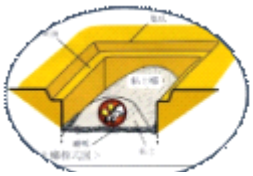
（奥田 健治）

画像① 地中レーダー探査の結果（後方部）
左の赤い部分が後方部。４０ｃｍの深さごとに６つの画像で表している。左上から右下へと深くなる。左上から２番目の画像（深さ４０cm～８０cm）に注目。

□ の部分に方形(４ｍ×７ｍ)の弱い反応。墓壙（墓穴）か。
○ の部分に長方形で強い反射（５ｍ×２ｍ）石室か。



画像②木棺直葬想像図


画像③　粘土槨想像図

画像④　石室想像図

荒木山の古墳を顕彰する会
平成三一年度　会員研修会
「美作地域の官衙と古代寺院」
講師　切明 友子　先生

四月一七日（水）、北房文化センター研修室で元真庭市監査事務局長の切明友子先生を講師に会員研修会を持ちました。先生は、落合町教育委員会で谷尻遺跡（赤茂）・郡遺跡（落合町鹿田）・古市場遺跡（落合町栗原）の発掘や調査を担当された方です。

大部の資料を準備され、その資料に沿って分かりやすく話されました。美作六郡（英多・勝田・苫田・久米・大庭・真島）の郡衙と古代寺院について概略の説の後、発掘調査をされた真島郡の郡遺跡について発掘状況や分かったことなど詳しく話されました。真島郡では、郡衙として郡遺跡や高屋遺跡があるが古代寺院は未確認であること。（大庭郡では、古代寺院として五反廃寺がある）それぞれの郡衙の側には古代寺院があり、それは民衆を引きつけ、地域支配を容易にするものである。下一色二号墳出土の陶棺片や瓦当文・木山坂元の骨蔵器、勇山寺東側駐車場造成地から出土の布目瓦などから、古代寺院の存在が勇山寺近辺にあったかも知れないなど。

備中の住人である我々にとって、やなじみの薄い美作地域の古代を知る、良い機会となりました。

（畦田 正博）

新元号　令和　仄聞

荒木山の古墳を顕彰する会

顧問　戸村　彰孝

時に天平二年（西暦七三〇）正月十三日、太宰帥大伴旅人卿の庭には雪かと見紛う白梅が咲き誇り、梢に隠れた鶯の楽の音が響いていた。

この日、観梅の宴に招かれたのは太宰府の次官大弐・小弐、筑前国守山上憶良のほか豊後や筑後の国守ら九州各国の上級官人たちであった。万葉集巻五には、主人大伴旅人の序と共にこの日詠まれた短歌三十二首が収められている。令和の出典は序に求められた。

初春の令月、気淑しく風和らぐ。
梅は鏡前の粉に披き、蘭は佩後の香を薫る。
：宜しく園梅を賦して短歌を成すべし。

（岩波文庫「万葉集」㈠）

※令はめでたい・美しいという意味。

この宴が催された時の前年に吉兆があった。

「天王貴平知百年（すめらみこと、たいらぎをたっとび、ももとせをしろしめす）」の七文字を背負った亀が献上されたのである。

聖武天皇は是を瑞祥として八月、神亀の元号を天平と改めた。観梅の宴は、天平時代の幕をあけた慶祝の宴といえるのではないか。

令和の元号制定の由来はこのような歴史を持っている。

「令和」は、天上天下めでたく、人と人・人と自然が相和す時代の到来を待っているのである。

このところ、改元をめぐって百家争鳴の感があるが、焦点は序にあって歌が忘れられている。そこで、歌人として知られる大伴旅人と山上憶良が詠んだ当日の歌を認めておきたい。

大伴旅人は天平二年当時六十六歳。この頃、万葉集の撰者といわれる子の家持と共に居た。この年十月、大納言に進んで家持と共に帰京。

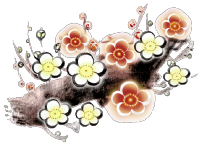
わが園に梅の花散る
ひさかたの天より雪の
流れ来るかも

山上憶良はこの年七十一歳の高齢。かつて遣唐録事として入唐五年の留学経験をもつ。帰朝後一時朝廷にあったが、出雲国守を経て筑前国守七年、天平四年にようやく帰京した。

春さればまづ咲く
やどの梅の花ひとり
見つつや春日暮らさむ

※やは反語

仄聞するところ、平成最後の旧正月を迎えた太宰府天満宮では、その境内に新雪のような白梅が千三百年の往時を偲ぶかのように馨しい香を放っていたという。



現場に立つ

昭和六十三年二月末から一ヶ月間、大谷一号墳の第一次発掘調査が行われた。

その前年の初冬、彼はシイタケの原木を古墳からTUさんの自宅まで運ぶ羽目になった。

その経緯はこうであった。地元の住人のTUさんは、古墳の在る山を地主から借り受け、古墳の頂上辺りにシイタケの原木を　積み上げ、古墳の西隣に丸太小屋を建てていた。二、三年は立ち入っていないと見え、屋根の板は破れ、アルミニュームのヤカンや湯呑が散乱していた。

「TUさん、心配せんでもええ。シイタケの原木は教育委員会に運ばすからな～」

地元O議員の一言であった。担当者であった彼は、地元の高校生を一人頼んで休日に運ぶことになった。

原木は長さが一、二m程、太さは様々だったが、それを担いで山の斜面を一〇m程も上り、頂上で一輪車へ載せ、細く急勾配の道を下り、軽トラックに積み替えてTUさんの家まで運ぶのだが、小高い丘の上の家の入り口は道幅が狭く直角に曲がっていて、おまけに左は高い法面が底の田へと延びていた。二人は、肝を冷やしながらも原木を運び終えることができた。

発掘前夜の一コマである。

平成三一年度　前期の活動

平成三一年度も古墳やその周辺・登山道の整備や掃除を引き続いて行いたいと思います。

◆三月初旬に予定していました柴かきは、予定日・予備日共に天候が悪く中止しました。改めて秋に行いたいと思います。

◆三月一五日（金）に登山道の整備と階段の改修を行いました。

◆三月二五日（月）に東塚北側斜面の木竹の伐採を行いました。

「西の明日香村」の不思議は 畿内勢力へと繋がる（その一）

荒木山の古墳を顕彰する会 代表　久松　秀雄

私が、北房のネーミングを「西の明日香村」と提案したのは、大谷一号墳の第一次発掘調査が終わって間もない平成元年頃だったと思う。

大谷一号墳の調査を担当した平井勝氏は、この古墳の被葬者が大和政権から派遣された官人「吉備大宰石川王」ではないかと想定していた。当時、何の知識もない私は、石川王の出身地は奈良の明日香村で、北房の自然景観が明日香村に似ていて、この地に葬られることを望んだのではないか？或いは、大宰府の在ったと考えられる備中南部は吉備の本拠地であり、安眠できなかったのではないか？などと想像を巡らせたが、何れも見当違いであった。

そうした時、谷尻遺跡で弥生時代末期の首長の家が発見されていたのを知り衝撃を受けた。

家の周囲には溝が巡り、溝から大量の土器が発見された。土器は県南や四国からも来ていたが、畿内の物が種類や量で他を圧倒しており、集落ごと移住したのではないかと思われるほどの状況と報告書は記している。

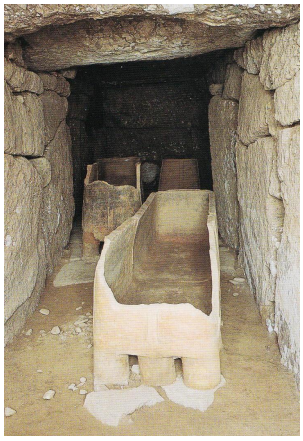
それを知った私は、「北房盆地は西の明日香村だ！」と直感した。それは、私の勘違い、思い過ごしであったかも知れなかったが、魅力的なネーミングに思えた。

その後、平成九年に北房町は「西の明日香村整備構想」を策定し、その実現を目指していた。

さて、北房地域には古代の不思議がいくつかあげられるが、それらの根っこが畿内勢力に繋がっているように思われ、北房はやはり西の明日香村なのだとの思いを強くしている。

例えば荒木山に在る二つの古墳である。古墳時代初期（三世紀末）に東塚が、続いて四世紀になって西塚が造られている。古墳時代は、三世紀の中頃に、それまで各地の首長が思い思いに造っていたお墓を、前方後円（方）墳に統一したことに始まる。中央政権が各首長の勢力や政権との親密度などによって、墳墓の形や大きさを規定している。荒木山に備中北部で最も早く、最も大型の古墳が何故造られたのだろうか。不思議なことの一つである。

そこで、こう考えたらどうだろう。前述の谷尻遺跡の首長の家は、荒木山東塚古墳が造られた時期に近く、畿内から多くの移住者がやって来たとすれば、畿内との親密度により他に先駆けて新しい形の前方後方墳が造られたと。



〔定北古墳の石室（発掘時）〕

大谷・定古墳へ 大阪の視察団

去る三月一四日に大阪市の古墳関係者一五名が大谷・定古墳の視察に来訪しました。

いわゆる古墳時代から飛鳥時代に移る七世紀から八世紀初頭にかけて上中津井の地に六基の方墳が集中して築かれたことは、西日本でも大変珍しく、このことにより平成二〇年には国の史跡に指定されました。

大谷一号墳は、五段築成の方墳という全国的にもあまり例のないもので、切石積み石室や、出土した陶棺が須恵質のものであったり、金銅装環頭大刀や金銅製品が出土したりしたことなどに関心を示されていました。

また、定古墳では、東塚・西塚・定北など五基の横穴式石室の方墳が集中して築かれたこと、出土した金環・金糸など朝鮮半島のどこからもたらされたものかなど、質問がありました。

百済を支援した大和政権が高句麗との戦いで戦勝し、戦利品としてもたらされたものであるなど、様々なことが考えられますが、いずれにせよ中央（大和政権）との深い繋がりがあることが言えると考えられます。

一行は、この後蒜山の四つ塚古墳の視察に向かわれました。

（南條　保之）

《入会のすすめ》

趣旨に賛同し、入会を希望される方は、本会役員にお申し出下さい。そして、入会時に年会費三千円を納入下さい。

会員へは、当会の活動状況や計画をお知らせするほか、当会や真庭市が開催する歴史関係の研修会・講演会などもご案内します。

なお、本会発行の「荒木山通信」は、北房振興局・北房文化センターに置いてあります。

〔 地元での調査報告会〕
3月24日（日）